「動機」の社会学再考
――C.W.ミルズの二つのテクストを読む――

Reexamining the Sociology of 'Motives': A Critical Reading of C.W. Mills' Two Texts

内　田　　健
Ken UCHIDA

はじめに

米国の社会学者チャールズ・ライト・ミルズの著述者としてのキャリアは，デビュー論文を世に問うた1939年から，心臓発作による急死のために突然幕が降ろされた1962年まで，わずか20年あまりにすぎない。だが，その比較的みじかい期間に書かれた著作は，そのあと幾世代にもわたり新たな読者を惹きつけてきたし，そうして多方面からアクセスする読者たちは思いおもいの方角にむけて，ミルズの思想・考想・着想の継承と展開を試みてきた。

さて，こんにち，ミルズの遺産目録への記載項目にその「動機」論への貢献を数え入れることに，異を唱える者はないだろう。ミルズは「動機内在論」に代えて一種の「動機外在論」を提起し，「動機」を根源的な社会性を帯びた現象とみる視点をつよく打ち出した。その仕事は，動機の社会学的研究の端緒を開いた業績としてひろく認知されている[1]。そうして一種「聖典（カノン）」のような位置を与えられていることもあり，こんにち動機をめぐって綴られる社会学のテクストはほぼ例外なく，ミルズの仕事への論及，もしくは引用，少なくとも文献の挙示を含んで成立している。だが，そんなふうに「聖典」にまつりあげられたテクストが実際にはほとんど読まれていない，ということが往々にしてある。むしろ，読む／読まないとかかわりなく，挙示するのが儀礼と化したテクストを指して私たちは「聖典」と呼ぶ，ということかもしれない。ミルズのテクストは読まれているだろうか。それを確認するには，自分で実際に読んでみることだ。

ミルズは動機を主題とするテクストを二つ残した。

一つは，1940年，*ASR* に掲載された論文「状況に布置された行為と動機の語彙」（Mills 1940），もう一つは，1953年に刊行されたH.ガースとの共著『性格と社会構造』の第5章「動機づけの社会学」（Gerth and Mills [1953] 1964）である[2]。

すでに何人かの論者が指摘しているように，両者のあいだには重要な論点にかかわって異同が認められる[3]。そして私の考えでは，その異同に露呈しているミルズの考えの揺れ動きや曖昧さが，後続の社会学的動機研究の道行きを左右した面がある。二つのテクストを比較対照して読み込む作業をとおして，ミルズの

2011.11.14　受理

[1] 「常識的な動機内在論」対「動機外在論」という簡潔な整理は，井上俊（1986: 30-31）による。伊奈正人は，「動機外在説」とほぼ互換的に「唯名論的動機論」を併用している（e.g. 伊奈 1991: 3, 259）。

[2] 以下ではそれぞれ，「動機の語彙論」「動機づけ論」と略称する。なお，訳文の文責はすべて引用者にある。

[3] 両者の異同に言及した論稿として，Taylor（1979）と西川（1991）をあげたい。その一方，井上は，両者のあいだに基本的な論点の違いはないとしている（井上 1986: 30; 1997: 24）。後続の行文で示すとおり，本稿は，重要な点で両者には明らかに異同があるとみる立場をとる。

動機論を内在的・批判的に検討するための足がかりを見いだすこと。それが本稿の課題である。

1．二つのテクストについて

ここで，二つのテクストの成立経緯をみておこう。

「動機の語彙論」については，その出自を比較的簡潔に記述することができる。すなわち，このテクストは，1940年 8 月17日[4]にシカゴ大学社会調査研究協会（The Society for Social Research）の研究会の席上で読みあげられたペーパーの改訂版として，同年12月付で刊行された *ASR* に掲載されたものである。

その一方で，「動機づけ論」の成立経緯は判然としない。たしかに，このテクストを章の一つとして収載した『性格と社会構造』の刊行は，1953年の出来事である。だが，この章を含む同書の実質的な執筆時期がそのはるか以前にさかのぼることは，すでにほぼ確定した事実である。この件にかんして，推察の手がかりになりそうな材料を確認しておこう。

ガースとの共著になる『性格と社会構造』が刊行までにたどった複雑な経緯については，G.オークスとA.J.ヴィディチによる，一次資料を駆使した詳細な検証の報告がある。二人によれば，ガースとミルズが同書の構想を立てたのは，1941年である（Oaks and Vidich 1999: 57）[5]。

現段階でもっとも新しいミルズの評伝の著者であるD.ギアリーも，社会心理学の教科書（『性格と社会構造』）のプロジェクトを共同で執筆しようという合意がすでに1941年の夏までには二人のあいだに成立していたこと，同書の大半部分は1940年代の前半に書かれたテクストであること，以上二点を論定している（Geary 2009: 50）。ギアリーはその考証の根拠を，ミルズとガースのあいだで当時交わされた書簡の内容にもとめている。じっさい，ミルズの遺児たちが編集・公刊した彼の書簡集をながめると，1943年12月 7 日付のガース宛書簡で，「動機の章」に取り組んでいるとミルズが報告しているのが確認できる（Mills and Mills eds. 2000: 56）。

また，「動機づけ論」で言及されている文献が，M.ウェーバーの「動機」概念の定義を1947年に刊行された英訳本（Weber［1947］1964）から引いていることを除いて，すべて1940年代前半までに刊行されたものにかぎられることも，執筆時期の推定にあたって勘案すべき事項に加えたい[6]。

以上の状況証拠から推して，「動機づけ論」は1940年代の半ばまでにほぼ書きあげられていたとみて差し支えないだろう。

もう一つ，執筆時期を絞り込む直接の手がかりとなるものではないが，二つのテクストとの関連で注目すべき記述を書簡集から拾いあげておこう。

1952年 1 月 8 日付のD.リースマン宛書簡でミルズは，リースマンからの要望に応えて「動機の語彙論」の抜刷を同封すると書いたあと，「私はもう，この論文の内容では不十分だと考えています。それで，ガースと一緒にいま仕上げにかかっている『性格と社会構造』という本の一章として書きなおしました」とコメントしている（Mills and Mills eds. 2000: 161）。

この一節は二つの点でたいへん興味深い。

---

[4] ミルズが報告を担当した日付は，ミルズが母フランシスに宛てた書簡（日付なし，1940年秋）中の記述による（Mills and Mills eds. 2000: 42）。*ASR* に掲載された論文冒頭の註記では，研究会の開催期日が1940年 8 月16・17日と記されている。

[5] 同書の第 3 章（pp.57-90）は，刊行までじつに12年の歳月を要したこの共著書がたどった紆余曲折の一部始終を，詳らかにする作業に充てられている。

[6] 「動機の語彙論」では，ウェーバーが「動機」概念を定義した箇所が原文で引用されている。なお，引用に際して，以下の太字部分が脱落している。脱落箇所は「意味適合的（Sinnhaft adäquat）」というキーワードを含んでおり，引用を受けたミルズの本文とのあいだにやや不自然な齟齬を生じている。‘Motiv’ heißt ein Sinnzusammenhang, welcher dem Handelnden selbst oder dem Beobachtenden als sinnhafter ‘Grund’ eines Verhaltens **erscheint. ‘Sinnhaft adäquat’ soll ein zusammmenhängend ablaufendes Verhalten** in dem Grade heißen, als die Beziehung seiner Bestandteile von uns nach den durchschnittlichen Denk- und Gefihlsgewohnheiten als typischer（wir pflegen **zu**[in] sagen: ‘richtiger’）Sinzusammenhang bejaht wird（Weber［1922］1964: 8）. そのほか，「動機」論の観点から特筆すべきは，ミルズが1940年論文で全面的に依拠したK.バークが1953年までに刊行した二冊の動機論（Burke ［1945］ 1969; ［1950］ 1969）への言及がいっさい見当たらないことである。

一つは，「動機の語彙論」の受容状況にかかわることだ。これにかかわる通説[7]は概略以下のようである。

1968年，動機の社会学にとって画期的な意味をもつことになった論文が *ASR* に掲載された。「釈明（Accounts）」と題したこのテクストの脚註で，共著者のM.スコットとS.M.ライマンは，「ほとんど顧みられることのなかった小論（his much neglected essay）」（引用者註：「動機の語彙論」を指している）のなかで「釈明」という概念を最初に活用した人物として，ミルズを讃えている（Scott and Lyman 1968: 46, fn. 3）。こうして発表から30年近く経ったあとで「発掘」されたのを契機に，それまでさしたる反応を喚起することもなくほぼ忘れられていた一本の論文が一転「聖典」との声価を獲得することになってゆく……。

だが，リースマン宛書簡の上記一節から，1951年の暮れか52年の初めごろに，リースマンが「動機の語彙論」の存在を知り，興味を寄せたことが確認できる。1951年には，N.フートが動機を主題とする論文で，「言語が動機づけに果たす機能にただしく注目した」先行研究の一つとして，ミルズの業績に論及している（Foote 1951: 14）。管見のかぎり，これが「動機の語彙論」に寄せられた反応のうちもっとも早いものだ[8]。控えめにみても，50年代の初頭に，ミルズの動機論に注目する向きが皆無でなかったとは言えそうである。

リースマン宛書簡の文面はまた，ミルズ自身が二つのテクストの関係をどうとらえていたかをうかがわせるものでもある。読まれるとおり，ミルズにとって，「動機づけ論」は「動機の語彙論」の不足・不備を補う改訂版と位置づけられていた。リースマンに対しては，同封した抜刷と併せてまもなく刊行される新著で改訂版にも目を通してほしい，と遠回しに伝えていると読める。明らかにミルズは，当時近刊の状況にあった「動機づけ論」で，「動機の語彙論」の「不十分さ」を補うために実質的な改変が施されていると予告している。またこの箇所の書きぶりから，その「書きなおし」は，ミルズ自身の意思で，彼自身の手でおこなわれたとみるのが至当である。共著書の一部であるとはいえ，「動機づけ論」は，事実上，ミルズの単著作品として扱うことが許されるだろう。

以上をまとめておこう。「動機づけ論」の成立経緯は，詳細にかんして不明な点が残るにしろ，「動機の語彙論」の改良版とすべく，1943年には執筆が開始されていた。主要部分の文責はミルズに帰すべきものである。両者の内容に違いがあるとすれば，「動機の語彙論」を公表した1940年から「動機づけ論」の執筆時点（1943年ごろ）までのあいだに，ミルズ自身に生じた考えの変化を反映したものとみてよい。

2．ミルズ動機論の基本モチーフ

ミルズが提示した「動機」の見かたは，どんな点が新しかったのか。言い換えると，ミルズが打ち出そうとしたのは，どのような動機観への対抗的見地だったのだろうか。それぞれのテクストで対応する箇所は以下のとおりである。

> 主観的な行為の「源泉」として動機を推論的にとらえる立場がある。これに対し，動機とは，境界が定められた社会的状況で確認可能な機能をもつ類型的な語彙（ヴォキャブラリー）であるとみなしてもよいだろう。行為者は実際に，自己と他者に向けて，動機を言明し，動機の帰属をおこなう。一方に，推論される抽象的な動機に関連づけて行動を説明するやりかたがある。だが，動機の帰属と言明が行為において果たしている機能を観察可能な言語的メカニズムとして分析する，まったく別の方法もある。動機とは，ある個人に「内在する」固定的な要素ではなくて，社会的行為者によって行為の解釈がおこなわれる際に使われる用語なのだ。行為者がおこなう動機の帰属・言明は，説明の対象に据えるべき社会現象である。人びとが自分の行為にあれこれの理由を付与することにも，それなりの理由があるのだ（Mills 1940: 904 強調は原文）。

> 動機は一般に，個人の心的構造や有機的な個体に内在する，行為の主観的「源泉」であると考えられている。だが，動機にはそれと別のとらえかたもある。人は実際に自己や他者に動機を帰属しているのだから，

[7] 伊奈や井上による手際よい紹介を参照（伊奈 2010: 4; 井上 2008: 19-20）。

[8] R.S.ペリンバナヤガムによれば，フートの「動機」論は発表当時から注目を集め，引用される機会も多かったようだ（Perinbanayagam 1977: 104）。リースマンもフートの論文を読んで，ミルズの「動機の語彙論」に興味を惹かれたのかもしれない。

動機とは人が対人関係で類型的に使用する言葉であると考えることもできる。一方に，任意の行為系列を，推論的・抽象的な動機や何らかの心的構造に関連づけて説明するやりかたがある。だが，ある種の社会的状況で動機の帰属・言明が果たしている機能を観察するという，まったく別の方法もある。／……中略……動機――人が自分の行為に付与するあれこれの理由――の言明と帰属それじたいにも，それなりの理由がある。そうした理由を「たんなる合理化」であると片づけたりせずに，なぜ人がある振る舞いかたをするのかを理解するために活用する途もあるだろう（Gerth and Mills［1953］1964：114-115／は原文改行）。

この点にかんして，二つのテクストに異同はない。「動機」を「ある個人に「内在する」固定的な要素」，あるいは「個人の心的構造や有機的な個体に内在する，行為の主観的「源泉」」とみる一般的・常識的な見かたに対置して，「境界が定められた社会的状況で確認可能な機能をもつ類型的な語彙」，すこし平易な言いかたでは，「人が自分の行為に付与するあれこれの理由」を伝えるために「対人関係で類型的に使用する言葉」として「動機」をとらえる見かたを提示する。これが，ミルズが一貫して堅持する着想である。

さて，ここで「個人に内在する固定的な要素」とか「行為の主観的源泉」という表現は，何を指示しているのだろうか。もうすこし明確な像をつかむための手がかりになりそうなのが，「推論される抽象的な「動機」」とか「推論的・抽象的な動機」あるいは「動機を推論的にとらえる立場」という言いかたである。具体的な場面でじかに観察することができず，その存在を推論によって仮設するほかない，人間の心の深奥でうごめく姿形を欠いた何か。そんな抽象的な概念が指し示されているようだ。そうして措定された概念Xを基軸に構築される人間行為の説明図式を例示した一節を，「動機づけ論」から引こう。

フロイトによれば，心的構造（「欲動」）は社会的に回路づけられることもあるが，構造そのものの根本が社会の影響で変容することはない。たとえば「昇華」という概念には，役割に条件づけられた心的欲動の形式は「基本的欲動」の付帯的現象である，という含みがある。そうした「真の欲動」は，いずれにせよ心的構造ないし有機体組織に内在すると仮定されている。人間の根本にある生物学的性質と人間の文化的パーソナリティとの分割はこうして温存され，生物学的水準ないし心理的水準に形而上学的なアクセントが置かれる。感情や衝動といったさまざまな心理的プロセスこそが行為を動機づける「真の」要因であり，それ以外は紛い物であるか，いずれにしろ実在の個人のもつ真の動機の歪んだ偽物の表現である（Gerth and Mills［1953］1964：113）。

じかに名指されているのは，「欲動」を行為の「源泉」に見立てるフロイト派の動機観である。けれども，フロイト理論と家族的に類似した各種の動機論，すなわち，行為の基底的原因を有機体や心の「構造」の水準に探り当てようとする，あらゆるタイプの説明図式が射程におさめられていると読むべきだろう。それらに共通するのは，文化的な事象を脇に置き，行為を動機づける「真の」要因を「欲動」「感情」「衝動」といった「心的構造ないし有機体組織に内在すると仮定され」る形而上学的な（姿形のない）存在物にもとめようとする姿勢である。

そうした考えかたとは別の方途を探ること。生物学的／心理学的還元論の轍を踏まずに展開できる動機の論じかたを提起すること。それが，ミルズの社会学的動機論を駆動したモチーフだった。

そうした論脈をふまえると，「動機づけの問題とは，行為の舵取りの問題であって，原動力（motive power）の問題ではない」（Gerth and Mills［1953］1964：113 強調は原文）という多少謎めいた一節の含意もそれなりに腑に落ちる。「原動力」，つまり生理的・心理的プロセスの水準にあるとされる行為の「源泉」の在処をいくら探索しても，個別の社会的状況の平面に現象する行為の方向づけ（「舵取り」）を左右する機序の説明に役立つことはないだろう，という趣意なのだろう[9]。

さて，ミルズのモチーフは，上の引用文に登場する表現を借りて，別様にパラフレーズすることもできる。

[9] 「動機の語彙論」で対応する箇所は，社会学的アプローチでは「「なぜ」という問いが，任意の状況とその状況に特有の類型的な動機の語彙の観点から回答可能な「いかにして」という問いに置き換えられる」（Mills 1940：906）と述べているくだりである。

すなわち，〈「真の欲動（または「欲動」に類する抽象概念）」だけが「行為を動機づける「真の」要因」，「真の動機」であるとみる考えかたに対抗する動機観を提出すること〉というふうに。では，ミルズ自身の社会学的動機観で，「「真の」動機（the ‘real’ motives）」はどのように遇されているのだろうか。ミルズは，動機の真偽を判別する規準を，生理学的・心理学的プロセスとは別個に社会学的プロセスに見いだす方途を提示したのだろうか。それとも，動機をめぐる真偽の判別そのものを無意味な作業として棄却したのだろうか。

私の考えでは，「動機の語彙論」でのミルズはそのどちらとも違うアプローチを提案した。ところが「動機づけ論」では，その姿勢にかなり目立った変化――先回りして言っておくと，あきらかに着想の斬新さという点で「後退」と呼ぶべき性質の変化――が生じている。順を追って検証していこう。

3．「真の」動機をめぐって（1）――「動機の語彙論」の立場

前節の最後で「動機づけ論」から引用した一節は，「動機の語彙論」のつぎの箇所と対応する[10]。

> 仮説のうえで「たんなる合理化」と対置される「真の動機」の探索は，たいていのばあい，「真の」動機は何らかのかたちで生物学的なものだとする形而上学的な考えを導きの糸とする。そうして合理化の背後にあるより真の何かが探索される際に付きものなのが，たいがいの社会学者が保持しているつぎの考えである。すなわち，言語とは，先在する，より本物の，個人の「内奥」にある何かを外的に顕示するもの，つまり，そうした何かの外的な付随物である，とみる考えだ。「真の態度」を「たんなる言明」や「意見」と対置する構図には，私たちには，ある人物の使う言葉を手がかりにその人の態度や動機が「本当は」何であるのかを推論することぐらいが関の山だ，という含みがある（Mills 1940：909）。

すでに述べたように，ミルズは，「人が自分の行為に付与するあれこれの理由」を伝えるために「対人関係で類型的に使用する言葉」に照準する，動機研究の新機軸を提示した。それに対し，旧来の動機観に準拠する論者からこんな論難が寄せられるだろうことは，想像に難くない。

〈言葉で表明される行為の理由の大半は，自分のすること／したことを正当化ないし合理化しようとする不純な思惑を含んでいる。言語化・言明され，個人の外部，状況の表層に浮上した「動機」など，せいぜいのところ個人の内部・深層にある行為の「真の」源泉を探る手がかりの一つでしかない。「言明される動機」は，行為を産出する原因としては二義的であり，本質に対する仮象にすぎないものだ。そんなものの分析をどれほど重ねても，「真の」動機の解明はとうてい果たされないだろう〉。

このような考えを反駁する方略の一つは，そこで前提とされている〈表層＝偽・不純／深層＝真・純正〉という二元論的な構図に伏在する弱みを衝くことである。そんな弱みとしてミルズが着目するのが，「推論」という手続きにかかわる問題である。「不純なもの」を手がかりに「真なるもの」を探り当てようとするばあい，〈表層→深層〉という方向で推論を重ねる作業が不可欠である。その際，その推論の妥当性は，経験的な検証に十分耐えられるものでなければならないはずだ。ミルズはいよいよ「推論」の問題に切り込んでゆく。

> ところで，そうして私たちに推論できることがあるとして，それは何だろう。言明は，厳密には何の徴候なのか。言語的現象を手がかりに生理学的なプロセスを推論することなどできはしない。推論し，経験的に確かめることができるのは，ある行為が演じられた際にその行動に方向づけやコントロールをおよぼしたと目される，行為者によるまた別の言明だけである。「より内奥にある」とみなせる唯一の社会的な項目は，別の言語形式なのだ。「真の態度や動機」は，言明や「意見」[11]と種別を異にする何かではない。結局のところ，両者の違いは相対的・一時的なものでしかない（Mills 1940：909 強調は原文）。

---

[10] L.テイラーも，同じ箇所に念入りな検討を加えている（Taylor 1979：146-147）。

[11] ここでの‘opinion’には，「独断」や「臆見」といった否定的なニュアンスが付帯している。

「胃の激痛や血液中のアドレナリン濃度」と状況平面で展開される社会的行為との関係（Mills 1940: 909, fn．18）を説明する理論をいまに至るまで手にしていない私たちに，〈表層＝言語現象→深層＝生理学的プロセス〉の推論は不可能である。可能なのは，〈ある言明→別の言明→また別の言明〉というかたちで，タマネギの皮を剝くように，推論と検証を反復してゆくことだけだ。ただしこのばあいは，経験的調査研究の手続きが適用できる。なぜなら，深層に措定される不可視のプロセスないし構造体と異なり，言明される言葉は観察の可能な対象であるのだから。そんな観察を積み重ねてゆけば，「動機」を構成する言葉どうしのつながりから固有のロジックを浮かびあがらせることができるだろう[12]。つぎの箇所はかなり踏み込んだ書きぶりである。

> 言明される動機は，個人の内部にある何かの指標として使われるのではなく，任意の状況に布置された行為にとって類型的な動機の語彙を推論するための土台として使われるものである。「意見」ではなく「真の態度」を，「合理化」ではなく「真の動機」を知りたいと思ったところで，演じられる行為ないし一連の行為で暗示または明示される統制的な言語形式のほかに，私たちにとって有意味な探索の対象は存在しない（Mills 1940: 909-910 強調は原文）。

このように「動機の語彙論」のミルズは，社会学者が行為の背後や行為者の内部に「真の」動機や態度を詮索することは無意味であると明言している。だからこそ，動機の社会学は，所定の用法に従って言語化される動機の挙動をつぶさに観察する作業に専念するのだと。

だが，ミルズは「真の」動機探索活動そのものを無意味であると切り捨てているわけではない。動機の真偽を見極めようとするのは，心理学者や社会学者ばかりではない。行為者としての人びともまた，実際にさまざまな場面・状況で，他者や自己の行為を駆動する「真の」動機を突き止めようとする。しかも現代では，そんな「動機探しゲーム」がひときわ活況を呈しているようにも映る。こうした現象の背景をなす要因の考察は，動機の社会学にとって十分にレリヴァントな課題に数え入れられるべきものだ。

ミルズによれば，一次的（primary）な社会関係が優勢な農村社会では，動機群と行動部門との対応づけは明確で，状況ごとに適用すべき動機は人格内部に整然と区画化されていた。このように，〈行動部門－動機－人格〉が安定的な関係を保持しているかぎり，個別の状況で言明・帰属される動機に状況参与者が疑念をもつ余地はきわめて小さい。これに対し，近代化の進展とともに，「農村」を周辺に追いやり，主流の社会類型として取って代わったのが「都市」である。二次的（secondary）な社会関係が優勢な現代の都市社会では，動機の語彙を囲繞する環境にも激変が生じた。そこでは，

> 変化し競合する動機の語彙がひしめきあって働いており，どの語彙がどんな状況に適合するのかも判然とは区分されていない。かつては限定された状況で疑問の余地なく通用した動機に，いまでは疑問の目が向けられる。種々の動機が，所定の状況で同様の行為を引き起こす可能性がある。だから，さまざまなかたちで状況に布置された人は困惑をおぼえ，自分を「突き動かした」のはどの動機なのか詮索することになる。そんな探求を知的に推しすすめたあげく生まれたのが，合理化というドグマを掲げ，組織的な動機の売り込みに勤しんできた，精神分析のような運動だったのである。そうした知的現象は，分裂して対立しあう諸部門から成る個人化した社会でしか成り立たない（Mills 1940: 911-912）。

動機の競合・混合・対立が常態化した現代では，自分の行為を「突き動かした」動機，つまり「真の」動機が何であるか，自分でもわからないことが多い。自力での動機探しに困難をおぼえる人びとに専門的なサポートを提供する新規の知識産業として台頭したのが精神分析だ，という見立てである。

このくだりから読み取るべき点は二つある。

---

[12] そうして浮上してくるはずのものが「動機の語彙」である。つぎの引用文をみても明らかなように，「言明される動機」つまり動機の表明に使われる個別の言葉と「動機の語彙」とが区別されていることに注意しよう。ミルズがケネス・バーク（[1935] 1984）に倣って「用語系（terminology）」と互換的に使用する「語彙」は，集合名詞なのである。この論件は，別の機会に立ち入って検討したい。

第一に，ここでは，「動機の真偽をどのように判別できるか」という問いが，「どのような社会的条件のもとで動機の真偽が重大な問題になるのか」という知識社会学的な問いへと変換されていること。社会学者は，人びとが動機の真偽にこだわっている理由には関心を寄せるが，みずからが真偽の判別作業に関与するには及ばない，という姿勢である。むしろ，知識社会学的なアプローチを徹底しようとするなら，対象とする動機の真偽については判断停止ないし無関心の態度を貫かねばならない，と言うべきだろう。

第二に，精神分析運動に対し，きわめてクールな視線を送っていること。その姿勢は，分析家の仕事に「動機の売り込みmotive-mongering」という辛辣な表現を充てていることからもうかがえる[13]。「フロイト的な動機の用語系（ターミノロジー）」は，「マルクス主義的な動機」「営利的な動機」「道徳的・宗教的な動機」「金銭的な動機」「快楽主義的な動機」とともに動機の語彙（＝用語系）の一種目という扱いを受けるにとどまっている。この点は，「動機づけ論」との異同をみるうえで重要な点である。

そもそも，動機の真偽が問題とされるばあい，たいていはごく素朴な動機観――動機を「人の心の奥底に内在する何かを言語で表現したもの」とみる立場――が前提とされている。そんな動機観に立てば，〈心の奥に実在する行為の原動力の正確な言語的表現＝再現こそが「真の」動機であり，不正確な言語的表現＝再現は「偽の」動機である〉というかたちで，とりあえずは真偽の判別規準を立てることができるだろう（こんどは表現＝再現の正確性をどうやって測定するかが問題になるにせよ）。ここで想起しよう。こうして持ち出されている素朴な動機観こそは，ミルズが動機の社会学の構想にあたって否定的媒介にした当の考えかただったはずである。

つまり，ミルズ動機論の発端にあった着想を素直に展開すれば，動機の真偽をめぐる詮索については「方法論的な無関心」を貫き通すべきであるのは明白だった。その点，「動機の語彙論」は初発のモチーフが敷設した軌道を逸れることなく構成されていると言えるだろう。

4．「真の」動機をめぐって (2) ――「動機づけ論」の立場

「動機づけ論」は，一読つかみどころのない印象を与えるテクストである。注意深く読み返すと，その印象は前半部と後半部のあいだに生じている齟齬に起因することがわかる。「真の」動機の問題が集中的に扱われるのは後半部分である。そして，ほかでもなくこの論点の取り扱いが，「動機の語彙論」との重大な異同を生むことになった。

すでに2節で引用した箇所からも明確に読み取れるように，「動機づけ論」には「動機の語彙論」での主張を再説した部分もある。とりわけ前半部（「1．社会学的アプローチ」／「2．動機の語彙」）は，「動機の語彙論」の字句修正版とみなしてよいほどだ。

ミルズは冒頭で，「動機づけ」の機序を観察・理解可能な平面で解明するためには，性格構造を構成する「有機体（organism）」「心的構造（psychic structure）」「人（person）」の三層のうち，「人」の水準に視点を置くのが，もっとも有望なアプローチであると述べる。その理由は，以下のようである。

> 私たちが行為を理解する際に有機体が関連するのは，有機体がもたらす効果が他の人による社会的な評価に媒介されるばあいにかぎってのことだ。また，心的構造の衝動や感情や知覚は，人の社会的組織によってパターン化され，回路づけられる。したがって，有機体や心的構造が理解可能な動機づけの一部になるかぎりで，それらは人の観点から，もっとも容易かつ有意義に把握することができるだろう。なぜなら，感情的ないし有機体的な均衡が組織され，達成されるのは，ほかでもなく人の観点からなのだから（Gerth and Mills［1953］1964: 114）。

動機の社会学は，有機体の状態や心的構造の様態を直接関心の対象に据えることはない。さまざまな状況の平面で，振る舞い，語る存在として観察可能なのは人（パースン）であり，有機体の状態や心的構造の様態を記述する言語を操るのも人にほかならない。有機体や心的構造が動機づけに有意味に関与するには，言語による記

[13] フロイト主義に対するこうした見かたの着想を，ミルズはケネス・バークに負っている。註16を参照。

述を経由しなければならない。このように動機づけを言語現象として考察する立場を徹底する以上，当然のこと，関心の照準は人に定められる。「動機づけ論」が「動機の語彙論」と出発点を共有していることをよく示している一節である。

ところが，後半部（「3．「真の」動機」／「4．動機の意識」）に入ると，議論の様相が大きく変わっていく。

「「真の」動機」と題されたセクションでは，状況参与者によって適切十分なものと是認される動機の語彙は「どのような条件のもとで「真の動機」であるとみなしうるのか」という自問がつぎのように返答される。

> ある動機の語彙がより深く人に内面化[14]されているほど，また，心的構造への統合がより緊密であるほど，それが「真の動機」を含んでいる見込みもより大きい，と言えそうだ。むしろそれこそが，「真の動機」という言葉のしかるべき意味だと言ってもよいだろう。動機を「検証」するには，任意の動機の語彙が性格構造のどの水準に統合されているのかを突きとめなければならない（Gerth and Mills［1953］1964: 120）。

さらに，

> 動機を探るには，動機の語彙の機能と文脈との観察が必須である。任意の動機がどの程度深く性格構造に統合されているのか，つまり，どの程度それが「真の」動機と考えてよいかの推論が可能になるのは，そんな観察をとおしてなのだ（Gerth and Mills［1953］1964: 120-121 強調は原文）。

ここでは，「真の」動機にかんして「動機の語彙論」で貫かれた態度が，いともあっさりと覆されている。ここで起きている事態を箇条書きで整理してみよう。

第一に，動機の真偽の判別規準は「心的構造への統合の緊密度」であると明記することにより，動機の真偽問題に対する判断停止が解除されている。事実上，この時点でミルズは特定の「動機の語彙（用語系）」，つまり「動機の理論」にコミットしたことになる。

第二に，性格構造論の文脈で言えば，人と心的構造とのあいだで主客の転倒が生じている。「人（パースン）の社会的組織」が「心的構造の衝動や感情や知覚」をパターン化・回路づけするというテクスト冒頭で示された構図（Gerth and Mills［1953］1964: 114）が，心的構造が人の言語行動である動機づけの規定因であるという構図へと，きれいに反転されているのである。「言語的現象を手がかりに生理学的なプロセスを推論することなどできはしない」とか，「言明される動機は，個人の内部にある何かの指標として使われるのではない」（Mills 1940: 909）といった「動機の語彙論」での主張は，あっけなく撤回されているようだ。言明された動機と心的構造の様態との適合度を検証しようとすれば，ここで否定されている論理的操作を回避することなどできないのだから。

第三に，ミルズがコミットした動機の理論は，実質的に，フロイト主義的な動機理論の似姿になっている。ミルズは，「動機の語彙論」と「動機づけ論」の前半部の各所で，「心理的水準に形而上学的なアクセント」（Gerth and Mills［1953］1964: 113）を置くフロイト主義的な動機の用語系に対置するかたちでみずからの動機論を展開してきた。だが，心的構造と緊密な結びつきを保持する動機の語彙がより「真」であるとみる考えが「心理学的な形而上学」から自由であると強弁することは難しい[15]。

フロイト主義との接近は，最後のセクションである「動機の意識」でさらに明白になっていく。無意識的

---

[14] 西川（1991: 76，n．6）が指摘するように，「動機づけ論」では，（「動機の語彙論」で使われることのなかった）「内面化する internalize」という動詞が頻出する。この点にも，当初否定したはずの「動機内在論」に回帰してゆく徴候を嗅ぎ取ることができるだろう。

[15]「動機づけ論」には，「注意を向けても想起することのできない何らかの動機や感情があり，それらが想起できるようになるのは，自尊心や安心感を損なわずに誰か他者の前で使うことのできそうな動機の語彙に組み入れられるときである」（Gerth and Mills［1953］1964: 128 傍点は原文，下線は引用者）という一節も読まれる。ここでは，無意識の領域に抑圧されている動機や感情の実在が，躊躇なく肯定されている。

動機の問題と動機の真偽問題が交錯している一節を読んでみよう。

> ある人に特殊な面接を実施し，その結果をふまえて，その人の真の動機づけと偽の（sham）動機づけを判別する状況がありうる。……中略……精神科医は，順序立てた巧みな問いかけによって，当該の人に動機を告白させ，しかもその動機こそが，それまで意識してはいなかったけれど真の動機なのだと当人が信じ込むように，面接のお膳立てと誘導をおこなう。面接がすすんでいくと，その人はそれまで普通に使い，他者に対しても帰属させてきた型通りの動機を手放していき，やがて自己に対して新たな動機を使用するようになる（Gerth and Mills［1953］1964：125）。

引用した部分の直後に，これとよく似た場面の例として「嘘やごまかしを見破るための周到な技法が駆使される警察官の尋問」（Ibid.）があげられている点に注意したい。つまりこの情景は，〈虚飾が取り除かれ，真実が解明されるプロセス〉の一例と解すように要請されているようなのだ。そのばあい，精神科医は，意識上の動機の「虚飾」性を暴露し，意識下から「真実」の動機を発掘する作業に従事する専門職として描かれている。要するにこの一節は，無意識的動機の解明を重視するフロイト主義的な動機理論をほぼ無批判になぞっているとみるほかない。

「動機の語彙論」で分析の場面に言及した箇所と見くらべれば，両者の違いは明瞭である。

> フロイトの診療室で長椅子に横たわって自分の心を覗き込む患者たちが使うのは，自分たちに既知の動機の語彙だけだった。そこでフロイトは，自分の得た直感にしたがって後続の会話を誘導した。……中略……精神分析は第一次大戦後に広く普及したが，性行動にピューリタン的なコントロールをおよぼさないフランスで人気を博すことはなかった。精神分析的な動機の用語系に親炙した回心者には，他の用語系がどれも自己欺瞞的に映る（Mills 1940：912）。

ここで描かれる「フロイト」は，クライアントにとって「既知の」語彙を「未知の」語彙に置き換える作業に従事している人物にすぎない。さらに，フロイト主義的な動機理論の成否を左右した社会的条件が指摘され，特定の動機理論の受容が宗教上の「回心」になぞらえられている。

試みに，「動機の語彙論」の視点を堅持して，精神科医の診療室で進行する事態を記述しなおしてみよう。

> 分析家は，面接開始時点でクライアントが意識平面に保持していた動機の語彙を「偽物」として棄却し，無意識の領域から「本物」の動機を掘り出してみせる。そこで実際におこなわれているのは，まるで機械の部品交換のように，任意の語彙を別の語彙に取り換える作業にほかならない。分析の成否は，動機の真偽にかんする分析家の判断を対象者が是認するか，言い換えれば，〈意識上の動機＝偽／無意識の動機＝真〉という精神分析的な動機理論の「教義」をクライアントが受容するかどうかにかかっている。

このようにリライトすると，動機の真偽をめぐる詮索が「動機の語彙論」と相容れない関係にある事情が，あらためて浮き彫りになってくる。

そもそも，ある人のある言動の「真の」動機を探索する人は，その言動の「真の」動機（ミルズの言う「原動力（motive power）」）がどこか（たとえば無意識の領域！）に実在することを疑わない。そのとき，動機の実在性は特定の「動機の語彙・用語系・理論」と独立に担保されているはずだ。そうでなければ，〈語彙Aは「真の」動機を捕捉しているのに対し，語彙Bの網にかかるのは「偽の」動機ばかりだ〉，といった判別そのものが意味をなさない。動機の真偽を探る人の目には，複数の語彙・用語系・理論が「真の」動機の発掘競争を繰り広げている光景が映しだされているのだろう。その世界では，他の語彙をさしおいて実在する「真の」動機を真っ先に掘り当てたものが，勝者の名乗りをあげる。

一方，「動機の語彙論」は，任意の動機理論と独立に動機の真偽判定をくだすことはできない，という立場に帰着する。動機の真偽は，特定の観点＝用語系（terms）と相関的であるほかない（「動機理論負荷的」である，と言ってもよい）。たしかに個別の状況で効力を発揮する動機は「真」の動機として是認されてい

るものだろう。ただしその「真」「偽」の値は，それぞれの語彙・用語系・理論の枠内で割り振られる。だから，「真の」動機は，動機の語彙の種目数と同じだけ存在する。

「動機の用語系にとって唯一の典拠は，特定の状況で行為者が実際に日常的に言明する動機の語彙なのである」(Mills 1940: 910) と述べられているとおり，動機を語る言葉の外部に何らかの実在（「真の」原動力）を措く発想は，きっぱりと否定されるのである。

さて，動機の真偽については，片づけておくべき問題がもう一つ残っている。

分析家がクライアントから「偽の」動機を取り上げ，代わりに「真の」動機を与える場面が記述されるとき，そこでの「偽の」は「実在と対応していない」の意味と解してよいだろう。分析家はクライアントの言明する動機が「誤り」であることを悟らせ，「正しい」動機の在処をさりげなく指し示す。クライアントは分析家に「本当に信じ込んでいる」動機を明かすのだが，両者のやりとりを通して，その動機は「間違い」であることが判明していく，というわけだ。

これに対し，「本当に信じ込んでいる」ものと違う動機，すなわち「嘘の」動機が語られることもある。つまり，動機の真偽を弁別する線は，「正しい」と「誤り」のあいだのほかに，「本心」と「嘘」のあいだに引くこともできるのである。

「動機の語彙論」に，動機の言明に際して発話者が嘘をつくばあいについての註記がある。

> もちろん，動機がコミュニケーションで使われる以上，そのなかには嘘も混じっているだろう。だがそれは検証してみないと分からない。言明は，社会的な効力をもつからというだけで，嘘であるとは断定できない。ここでは，動機を言明する人物の誠実さよりも，言明される動機の社会的機能のほうを注視しているのである（Mills 1940: 907, fn. 11)。

ミルズの主張は明快である。すなわち，発話者が本心を吐露しているか，それとも心にもないことを口にしているかは，動機の社会学の関知するところではない。関心はもっぱら，動機の「社会的な効力」「社会的な機能」に絞られる。この点にかかわって，ミルズが二つのテクストどちらにも登場させるのが，〈所属する経営者団体の方針に従い，「公共心」にあふれた動機の語彙をつねづね口にしている実業家〉である。この人物の言動を動機の社会学の視点から観察するばあい，繰り返される動機の言明が上辺だけのものか本心に発したものかは問題にならない。いずれにせよ，言明される「その動機の語彙こそが，その人の社会的行為を補強する重要な要素」(Gerth and Mills [1953] 1964: 118) として社会的な効力を発揮しているとみるべきである。それに，同じ動機を繰り返し口にするうちに，それが発話者の習い性になり，「はじめのうちは外見を装おうとしただけの人物になっていく」(Mills 1940: 908) こともある。そんなことから，言明される任意の動機を「本心からの動機」と「上辺だけの動機」に截然と切り分けることは，実際にはきわめて難しい。

そもそも，「精神分析的な動機の用語系に親炙した回心者には，他の用語系がどれも自己欺瞞的に映る」(Mills 1940: 912) し，「権力，闘争，経済的動機にかんするマルクス主義の用語系の信奉者は，フロイトのそれを含む他の用語系は偽善か無知に起因するものだと口を揃える」(Ibid.)。つまり，フロイト主義者が摘出する「自己欺瞞 (self-deception)」やマルクス主義が摘発する「虚偽意識 (false consciousness)」は，発話者が本心から語った動機の「偽善性」を暴き出す装置として作動する。強力な動機理論は，「嘘偽りなく明かされた」動機は「真の」動機である，などという素朴な想定を，あっけなく打ち壊してしまうものなのである[16]。

「動機の語彙論」のミルズは，さまざまな動機の語彙・用語系・理論どうしの相克状況，すなわち「動機をめぐる政治」をメタレベルの視点から観察・記述・分析することを，動機の社会学の主要課題に位置づけ

---

[16] ミルズ自身が註記しているように，この点についてケネス・バークのフロイト論が貴重なヒントを提供したのは明らかである。「フロイト主義者たちの解釈によれば，その人物の本当の動機は，気高く心地よい美徳の覆いの背後に隠されている。……中略……フロイト主義者たちは，自己欺瞞のプロセスを指摘する。つまり，人はつらい現実に目をつむるために，みずからの振る舞いの説明に合理化を施していると言うのだ」(Burke [1935] 1984: 17-18)。そのほかの点でも，「動機の語彙論」はバークのテクストから多大なインスピレーションを得ている。その詳細は，稿を改めて論じることにしたい。

ていた[17]。残念なことに,「動機づけ論」のミルズは，同じ立場を堅持することに失敗している。(意図したことではなかったかもしれないけれど,）実質的に「フロイト主義的な動機の語彙」を受容したことで，ミルズの動機論じたいが「動機をめぐる政治」のオブジェクトレベルに降下してしまったのである。

おわりに

「動機の語彙論」の冒頭でミルズが予告したモチーフを，ここでもう一度読み返そう。そこには，〈個人の私秘的な状態との関連からではなく，さまざまな行為を調整する言語行動の社会的機能を観察することによって，動機の言明という行為を分析するモデルを提示すること〉と書かれてある（Mills 1940: 904)。本稿で示したのは,「動機づけ論」でミルズがたどり着いたのが，おそらく彼が当初思い描いた軌道からは相当に逸れた地点だったことである。

もとよりミルズの真意を知ることはできない。確認できるのはただ,「動機づけ論」のミルズが，「真の」動機の問題に踏み込んだあげく，言明される動機と「個人の私秘的な状態」(心的構造ないし無意識）とがどのように関連しあっているのか，という問題の圏域に足を取られてしまった経緯だけである。

本稿の読みが大きく的を外していなければ，ミルズは当初のモチーフを貫徹するのに失敗したと断じるべきだろう。だが,「動機づけ論」というテクストは，重要な教訓を残してもくれた。それは，動機の発話者の内面の問題に立ち入ること，言明された動機の真偽を詮索すること，真偽を判定する規準の特定を試みること，これらすべてが，動機の社会学にとって方法上の躓きの石にほかならない，という教訓である。

引用文献

Burke, Kenneth [1935] 1984. *Permanence and Change: An Anatomy of Purpose* (Third Edition with a New Afterword). University of California Press.

Burke, Kenneth [1945] 1969. *A Grammar of Motives*. University of California Press.

Burke, Kenneth [1950] 1969. *A Rhetoric of Motives*. University of California Press.

Foote, Nelson N. 1951. "Identification as the Basis for a Theory of Motivation." *American Sociological Review* 16(1): 14-21.

Gerth, Hans and C. Wright Mills [1953] 1964. "Chapter V: The Sociology of Motivation." In *Character and Social Structure: the Psychology of Social Institutions*. Harbinger Books: 112-129.

Geary, Daniel 2009. *Radical Ambition: C. Wright Mills, the Left, and American Social Thought*. University of California Press.

伊奈正人　1991.『ミルズ大衆論の方法とスタイル』勁草書房.

伊奈正人　2010.「動機の語彙論と知識社会学――動機付与論から「動機論の動機論」へ――」『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要』38: 1-24.

井上俊　1986.「動機の語彙」作田啓一・井上俊編『命題コレクション　社会学』筑摩書房: 30-35.

井上俊　1997.「動機と物語」井上俊ほか編『岩波講座 現代社会学 第1巻』岩波書店: 19-46.

井上俊　2008.「動機のボキャブラリー」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 第1巻 自己・他者・関係』世界思想社: 13-22.

Mills, C. Wright 1940. "Situated Actions and Vocabularies of Motive." *American Sociological Review* 5(6): 904-913.

Mills, Kathryn and Pamela Mills eds. 2000. *C. Wright Mills: Letters and Autobiographical Writings*. University of California Press.

西川珠代　1991.「社会学における「動機」概念の変容――ウェーバーの動機理解と「動機の語彙」論の動機付与――」『ソシオロジ』36(1): 63-79.

[17] 伊奈はこのモチーフのもつ再帰的な性質を「動機論の動機論」と表現している（伊奈 2010)。

Oakes, Guy and Arthur J. Vidich 1999. *Collaboration, Reputation, and Ethics in American Academic Life: Hans H. Gerth and C. Wright Mills*. University of Illinois Press.

Perinbanayagam, R. S. 1977. "The Structure of Motives." *Symbolic Interaction* 1: 104-120.

Scott, Marvin B. and Stanford M. Lyman 1968. "Accounts." *American Sociological Review* 33(1): 46-62.

Taylor, Laurie 1979. "Vocabularies, Rhetorics and Grammar: Problems in the Sociology of Motivation." In Downes, David and Paul Rock eds. *Deviant Interpretations*. Martin Robertson & Co.: 145-161.

Weber, Max [1922] 1964. *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der Verstehenden Soziologie* (Studienausgabe Herausgegeben von Johannes Winckelmann). Kiepenheuer & Witsch.

Weber, Max [1947] 1964. *The Theory of Social and Economic Organization* (Translated by Henderson, A. M. and Talcott Parsons. Edited with an Introduction by Talcott Parsons). Free Press.